

発見!おごおり遺産

No.14 水と農業

小郡市の中心となる産業は農業です。農業は弥生時代に始まり、徐々に発展してきましたが、人々はさまざまな方法で水の確保に取り組んできました。



豆田井手と関連する村々



当時の豆田井手付近



池内孫右衛門翁之碑

小

郡市には多くのため池があり、オニバスなど貴重な水生生物が生息し、鴨など多くの野鳥が飛来するため池は、市を代表する自然の風景と言えるでしょう。これらの多くは、農業が発展した江戸時代以降に造られ、現在でも活躍しています。

ため池とともに、市南部の農地の灌漑に大きな役割を果たしているのが、宝満川の稲吉堰です。造られたのは江戸時代前期の正保4年(1647)年で、工事の監督は、久留米藩普請奉行の丹羽頼母重次でした。この堰の完成により灌漑面積が大きく増え、現在の小郡市の農業の基盤を築きました。

小郡校区は台地上にあり、宝満川から離れているため、古くから農業用水の確保に苦労してきました。そこで人々が着目したのが、西側を流れる秋光川です。江戸時代、小郡村の人々は、秋光川が流れる対馬藩田代領の村々と何度も交渉を繰り返しました。時には水争いになることもあり、その一つに、元禄3年(1690)に始まる豆田井手をめぐる争いがあります。

豆田井手は、秋光川に設けられてい

た堰です。現在の井手籠橋付近に田代領野口村が造ったもので、当時は田代領4か村と小郡村の計5か村で利用していました。その頃幕府領(天領)だった寺福童村は、小郡村から水をもらっていました。幕府の天草代官所に訴状を出したのです。この水争いは、元禄10年(1697)に天草代官所によって、「田代領の村との正当な権利者は小郡村のみ」で、「寺福童村への水の配分は小郡村との協議事項である」と決定が出されました。

陸上自衛隊小郡駐屯地前の信号から約250m北側に進むと、「池内孫右衛門翁之碑」があります。江戸時代後期の文政年間、小郡町庄屋の池内孫右衛門は、西島村と大保村を流れていた高原川の水を小郡町に引きたいと考え、両村との交渉の末、高原堰を越える余水を利用することでまとまりました。碑の隣の水路は、現在もきれいに整備され、水をたたえています。

現在の小郡の農業の発展は、先人のさまざまな努力の上にあるのです。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと